

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ヨハンナ・シュピーリ作『ハイジ』の研究 (II)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1997-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/773

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ヨハンナ・シュピーリ作

『ハイジ』の研究（II）

山田 はるつ

1. 宗教の問題

1. 原作における宗教観

シュピーリの小説にはかならずといってもいいくらい、敬虔な老婦人か、牧師の未亡人が登場し、主人公を敬虔な生活へと導く。そして何らかの苦境に陥ったときには、神に祈りを捧げるか、賛美歌を歌って心を慰め、問題が解決したときや、幸運が訪れたときには神に感謝するというパターンが見られる。

高橋健二は、「愛の力と神への信頼」という文章の中で次のように言っている。

「ところで、ある批評家は、シュピーリの作品は善と悪とに、白と黒とにあまりにもはっきり分けすぎているといいます。宗教的すぎるという批評もあります。いつも、素晴らしい結末で終わっているのは非現実的であるというわけです。しかしなぜ子どもたちにハッピーエンドの物語を楽しませてはいけないのでしょうか。子どもたちはすでに、悲しいことも辛いことも経験しているのです。……子どもには希望が、未来がなければなりません。子どもの物語は明るく結ばれなければなりません。『ひたすら神さまを信頼していれば』道が開けると信じていたシュピーリにおいては、とりわけそうでなければなりません。シュピーリには、神に祈る人の楽観があります。子どもの物語におけるハッピーエンドは結局はそういう楽天主義からの自然の帰結でした。

『もし神が右手にすべての真理を持ち、左手に真理を求めてやまない一念だけを持ち、選べ！ といわれたなら、私はつつましくその左手にすがって、父よ、^{vv}給え、^{vv}純粋な真理は御身だけのものです、と言うであろう』と、シュピーリは言っています。人間としてあくまでも真理と真実を求めて力を尽くすが、究極は神に任せるという謙虚さがシュピーリの作品を貫いています。』¹⁾

それでは『ハイジ』の中に、宗教的な傾向がどのように現れているだろうか。ここでは特に第1部を重点的に見ていきたい。というのは、前節ですでに述べた通り、シュピーリは第1部だけでこの物語が完結すると考えており、その第1部は、ハイジの素朴な信仰心によるおじいさんの教会へ、共同体への復帰を主題としているからである。

ハイジに宗教心を植えつけたのは、クララの祖母であるゼーゼマン夫人、いわゆる「おばあさま」である。彼女はふさぎこんでいるハイジに言う。

「……だれにも話せないようなつらいことがあったら、天にいらっしゃる神さまに申しあげて、お助けくださいとお願いするのです。神さまは、私たちの苦しみは、どんな苦しみでもいやしてくださるのですからね。

……心にしょっちゅう、重苦しくのしかかるものがあるときには、お祈りするのがいちばんいいのです。そうすれば、いつでも神さまのところへ行って、なにもかも申しあげることができるし、だれにも助けてもらえないようなときに、助けてくださいとお願いすることもできるのです。神さまは、どんなときでも助けてくださって、私たちの気持ちをまた明るくしてくださるのですよ。』²⁾

ハイジは、それを聞くと喜んで自分の部屋に帰って神さまにお祈りをする。

しばらくたつと、ゼーゼマン夫人はまた元気のないハイジを呼んで、お祈りしているかどうかを尋ねる。ハイジがお祈りをしても神さまはちっとも聞いてはくださらないから、していないと答えると、ゼーゼマン夫人は次のように諭す。

「……いいこと、神さまは、私たちみんなのいいお父さまで、なにが私たちにとってよいかを、私たちは知らなくても、いつもご存じなのですよ。でも、私たちが、私たちにとってよくないことをお願いしても、神さまは聞き届けてはくありません。心からお祈りしつづけて、すぐに逃げ出したり、神さまを信頼する心をなくしたりしなければ、きっと、もっとずっとよいものを、授けてくださるのです。

ねえ、あなたが神さまにお願いしたことは、今のところは、あなたにとってよくなかったのですよ。神さまは、あなたの願いをお聞きになったのです。みんなのいうことを一度お聞きになって、全部おわかりになるのですから。いいですか、それだからこそ神さまなので、あなたや私のような人間とは違うのです。

……そして、いま神さまはあなたを見おろして、あなたに何か不足があっても、神さまをちゃんと信頼し、毎日、神さまのところに行き、お祈りをし、い

つも神さまを見上げているかどうか、ごらんになっているのです。』³⁾

ハイジは部屋に走って行って、お祈りをやめたことを後悔し、神に祈りを捧げる。

さらにフランクフルトから山へ帰り、おじいさんの小屋へ向かう途中で山に輝く夕日を眺めたときのことがこう描写されている。

「ハイジはこういうすばらしい光景の真ん中に立っていました。あまりのうれしさに、涙がぼろぼろとこぼれてきました。ハイジは両手を組んで、空を見上げ、大声で神さまにお礼をいいました。また、ふるさとに連れ戻してくださったこと、なにもかも、なにもかもが、まだこんなに美しく、これまで知っていたよりもはるかに美しいこと、そして、こんなにも美しいものが、なにもかもまた自分のものになったことを、神さまに感謝したのです。

ハイジの心は、こんなに大きな、すばらしい自然に取り囲まれて、幸せな気持ちでいっぱいになりました。それで、神さまにどうお礼を述べたらいいか、その言葉も見つからないほどでした。』⁴⁾

その翌日、ハイジはペーターのおばあさんを訪ね、本を読んであげた帰り道、おじいさんに言う。

「あたしが、あんなに一生懸命にお祈りしたことも、もし神さまが、すぐにかえってくださったら、あたしはすぐうちへ帰れたでしょうけど、パンも少ししか持ってこられなかったし、本を読んであげて、おばあさんを喜ばせてあげることもできなかったわ。

だけど、神さまはなにもかも、あたしにわかっていたよりも、ずっとよく考えておいてくださったんだわ。ほんとうにおばあさまのいっていたとおりになったのね。あたしが、悲しんでお願いしたときに、神さまが聞いてくださらなくてよかったわ。でも、これからはいつでも、おばあさまのいっていたようにお祈りをして、神さまにお礼をいうわ。お願いすることを聞いてくださらなければ、すぐに前のことを思い出すのよ。きっとまたフランクフルトのときと同じことで、神さまは、もっとずっといいことを考えていてくださるんだっていうことをね。

ねえ、おじいさん。あたしたちも、毎日お祈りしましょうよ。神さまに忘れられないように、もうけっしてお祈りを忘れないようにしましょうよ。』⁵⁾

そしておじいさんに、神の世界へ戻るができると言って、急いで小屋に帰り、放蕩息子

の話を読んで聞かせる。おじいさんは考え深げだが、何も言わない。しかし数時間後、ハイジのベッドの近くに膝まづき、ハイジが読んで聞かせた話の中の言葉を繰り返す。

「お父さん、私は、神さまとお父さんに対して、罪を犯しました。もうあなたの息子と呼ばれるねうちはありません。」⁶⁾

大粒の涙が、老人の頬を伝ってこぼれ落ちた。そして翌朝、おじいさんはハイジを連れて教会に姿を現す。

以上が第1部に見られるキリスト教についての主要箇所だが、ここで少しだけ第2部についても述べておく。

ハイジはペーターのおばあさんに賛美歌を何度も読んであげる以外になお、次のような言動をする。秋になると、フランクフルトから医者が出てくるのだが、彼は一人娘を亡くしたばかりだった。ハイジはそんな悲しみに沈んでいる彼の心を、じっと耐えていればきっと神さまがよくしてくださるのだと言って慰め、賛美歌を暗唱して聞かせる。医者はそれで遠い昔を思い出し、元気を取り戻すのである。

医者のあとで、今度はクララが訪ねてきたとき、ハイジと一緒に乾し草のベッドに横になりながら、なぜ星が輝いているのかを説明する。

「それはね、神さまが人間のためになにもかもちゃんと取り計らってくださって、人間は何も心配しないで、神さまにお任せして安心していられるようになっているのを、ああして高い空で見ているからなのよ。それが星にもうれしいのね。ほら、合図しているでしょう。あれは、あたしたちにも楽しい気持ちを持ちなさいって、すすめているのよ。」⁷⁾

そして、お祈りすることを忘れてはならないと、2人でお祈りをする。

そしてクララが初めて歩けるようになった日にも、ハイジはお祈りすることがどれほど大切なのかを説き、最後にこう言う。

「今日、あたしたちは、神さまに、心からお礼を申しあげなくちゃならない、と思うわ。あなたが歩けるようになったっていう、幸せを恵んでくださったんですもの。」⁸⁾

以上はハイジに関連して説かれるキリスト教信仰だが、それ以外にも、ペーターが車椅子を崖から落としたことが知れたとき、ゼーゼマン夫人が説教する場面がある。

「……神さまは、人間が生まれたときから、心の中に番人をお置きになるんだけど、その番人は、人間が悪いことをするまでは、心の中で眠っています。ところが、いったん悪いことをすると、手に持った小さな針で、ちくちく刺しつづけるので、刺される人間は、落ち着くひまもなくなってしまいます。おまけに、番人は、こう叫んで、苦しんでいる人間を不安に陥れるんです。『なにもかも、ばれてしまうぞ。さあ、連れ行かれて、罰を受けるぞ!』って。

それで、その人は、いつでもびくびくしながら暮らさなければならなくなっていて、もう、ひとつも楽しいことがなくなってしまうのですよ。ペーター、あなたも、今、そんな気持ちでいるんじゃないですか?」⁹⁾

そしてこの小説の1番最後にこう記されている。

「最後にペーターのおばあさんが言った。『ハイジ、私に賛美歌をひとつ読んでちょうだい。もう今では、神さまをほめたたえ、神さまに、私たちのためにしてくださったことのお礼を申しあげるしかないような気がするんですよ。』」¹⁰⁾

シュペーリは第1部を書いたときには、おじいさんを社会復帰させたいために、ゼーゼマン夫人によってハイジを信仰に導いたのだと考えられる。フランクフルトにおいて、神に祈ることが本当に救いになったといえるだろうか。なぜなら、神に祈るようになった後で、ハイジは夢遊病になっているからである。あれほどおじいさんを切々と説くことができるほど信心深いハイジが、ゼーゼマン夫人が言っていたように、「神を信頼する心をなくさなければ、きつとずっとよいものを授けてくださる」と心底信じていたならば、それが彼女の心の救いとなり、夢遊病になることはなかったように思われる。矢川澄子は次のように言っている。

「大人こそ神様 ———

まえに書いたささやかなスピリ論に、わたしは思わずこんな題をつけた。
……ハイジは、というよりスピリは、たしかに保守的であり、なにかといえば讚美歌をもちだし、お祈りをしたがる。しかし現実にはハイジを救ってくれるものは、神さまではなくて周囲の大人たちなのだ。」¹¹⁾

それはどういう大人たちだったのか。フランクフルトで暮らすハイジにとって一番の慰めになったのは、ゼーゼマン夫人の愛情ではないだろうか。そしてたしかに、現実には医者が高ハイジを山に帰すように診断し、それを実行したのはゼーゼマン氏である。夢遊病はハイジを山へ帰すための手段であった。もし、もっと早く神に救われていたら、ハイジは夢遊病にもなら

ず、山へ帰ることはできなかつただろう。そうすれば、ハイジの言う通り、ペーターのおばあさんに白パンをあげることはできなかつたし、(字を覚えて) 賛美歌を読んであげることもできなかつた。そして、ハイジは言っていないが、おじいさんを教会へ、デルフリ村人たちのところへ導くことはできなかつたはずである。フランクフルトで神に祈っても、直接の助けにはなっていない。しかし、おじいさんを社会復帰させるためには、どうしてもハイジに宗教心を植えつける必要があつた。そのためにこそ、ゼーゼマン夫人の存在があり、ハイジが神に祈る姿があるのだ。

それならば、シュピーリの説く信仰とはいったいどういうものなのだろうか。

それは、あらゆる不幸も苦境も、そして貧困さえも、みな神の摂理として受けとめなければならぬという考え方に立っている。どんなにつらいことがあろうと、神さまはすべての人間を守っていてくださる。人間が悪いことをしたときには、神さまが、天を見上げることができないという罰をお与えになる。神さまに恥じるような行為をしてはならない。どんなにつらいことがあつても、じっとがまんして待っていれば、きっと神さまがよくしてくださる。つらいことは、神さまのお与えくださる試練なのだから、常に祈ることを忘れてはいけない。こういう考え方は『ハイジ』だけではなく、彼女の作品すべての根本に横たわるものといつてもよいだろう。たとえば『コルネリの教育』にも、『ハイジ』との共通点が見出せる。第1に、マルテという敬虔な老女がコルネリに、悪いことをしたら、いつもびくびくしていなければならない、空を見あげようとすると、心にとがめて心配でたまらなくなる。神さまにだけは隠せないのだと言っている点である。これはゼーゼマン夫人がペーターを呼んで、車椅子を壊してしまった行為についてお説教をする部分と共通する考え方であり、第2に、

「……でも神さまが、私たちに理解できないことを、そのままお認めになるような場合には、そこから私たちにとって、よいことが生まれてくることを確信しています。私たちは、ただ待っていさえすればいいのです。」¹²⁾

とマルテは続けている。この部分は、フランクフルトで「あなたが神さまにお願いしたことは、今のところはあなたにとってよくなかつたのですよ。」とゼーゼマン夫人がハイジを諭す言葉と似ている。第3に、

「……どんなにつらいことがあつても、あなたは何につけ神さまのご助力をお願いできるのです。神さまは、いつでもあなたを助けて、あなたにとっていちばんいいようにしてくださり、あなたの幸福に役立つことをしてくださるのです。」¹³⁾

という考えは、ゼーゼマン夫人がハイジにお祈りをするよう最初に勧めたときと同じであり、第4に、コルネリが町での生活が楽しくて「ああ、神さまがこんなに私をよくしてくださったのだわ！」と神に感謝する点である。ハイジも山に帰ることができたとき、やはり神に感謝する。つまり幸福な結果になったときには神に感謝してお祈りをするという点である。

ここに説かれる信仰は、悪いことも善いこともすべて神のみわざであり、どんなときでも神さまに祈ることを忘れてはならない、苦しいときには神さまにすべてを委ね、ただ静かにお祈りをして、神さまの裁きを待ち、楽しいときには神さまに感謝せよ、ということなのだ。

ハイジがおじいさんに話して聞かせる放蕩息子の話は、新約聖書の『ルカによる福音書』の第15章「放蕩息子の帰還の話」に由来する。シュペーリは『ハイジ』を通して、神にそむいた生活を送ってはならないと説いている。ハイジの父親トビアス (Tobias) は大工だったが、事故に逢って亡くなり、それを心因に母親のアーデルハイト (Adelheid) も亡くなったのだが、それもすべてはおじいさんの神にそむいた生き方に問題がある、としている。

このことはデーテ (Dete) によってこう語られる。

「村じゅう、2人の悲しい身の上話でもちきりで、おじさんが神さまを恐れない生活をした罰だっていろいろいわれたものよ。」¹⁴⁾

そしておじいさんは、牧師に懺悔するように言われてもかたくなに断り、アルムの山の上に引き籠もって、神と人間と仲違いしながら暮らしている。ハイジはそんなおじいさんを社会復帰させることに成功する。

『ヴィルデンシュタイン城』、『グリトリの子どもたち』(Wo Gritlis Kinder hingekommen sind, 1883. Gritlis Kinder kommen weiter, 1884) にも、同様に神や人間から離れた生活をしている老人が登場し、やはり1人の少女によって、その社会復帰が成し遂げられる。『ヴィルデンシュタイン城』の最後で、ブルーノ男爵が述べる悔恨の言葉は前節に引用したが、彼の社会復帰は、『ハイジ』と同じように、メツリ (Mäzli) という少女によって実現される。しかしながらメツリは、神の力をかりて彼の心を開くのではなく、彼女の純粋な心と、明るさによって社会復帰をさせるのである。『グリトリの子供たち』ではエルスリ (Elsli) という少女が、漁師の家の老人を再び神への道に導く。老人は言う。

「人間は苦しくなると、天の神さまがいて、助けてくださると信じ、助けてくださらないと、祈ってもむだだと思ってしまう。」¹⁵⁾

エルスリは賛美歌を歌って、そんな彼の心を開く。

「そうだ！ もうずっと前に聞いたことがある。まだ教会へ行ってることだ。今でもこの歌のとおりだ。ともかく、その天国に行く道をまた見つけることができればいいのだが。」

神や人間に背を向けていた老人の心を再び神に向かわせるという点に関して、この2編の長編小説は『ハイジ』と共通しているが、神の力は『ハイジ』におけるほど強くはない。それだけ『ハイジ』のキリスト教信仰の強さが分かるであろう。

2. 訳本にみられる宗教観

現在日本で出版されている『ハイジ』は、ほとんどが簡約版で、完訳は数少ないが、そのページ数が少なければ少ないほど、省略される、もしくは薄められるのが宗教的な部分である。そして新しい版ほどその傾向が強い。ここでは、重要な2箇所において、その部分がどう変更されて翻訳されているかを見てみたい。それはゼーゼマン夫人がハイジに祈りを教える部分、そしてハイジがおじいさんを社会復帰させる部分であるが、特に興味深いのは絵本のケースである。現在出版されている大型絵本（約27cm, A4版）はこの2箇所にまったく触れていないのが大半である。

現在最も新しい「ハイジ」の日本語版は、徳間アニメ絵本第12巻『アルプスの少女ハイジ』¹⁶⁾である。この中では、ゼーゼマン夫人の役目は字を数えるだけで、おじいさんの社会復帰は、ハイジを学校に通わせるという理由で、村へ下るという形で行われる。宗教的な部分といえば、ハイジがペーターのおばあさんに賛美歌の本を読んであげるのみである。また1993年に出版された武鹿悦子訳『ハイジ』¹⁷⁾では、ゼーゼマン夫人はまったく登場せず、おじいさんの社会復帰、つまり教会へ、デルフリ村へ下りて行く話もなく、ロッテンマイヤー女史が「ばあや」と呼ばれる始末である。ただ、フランクフルトから山へ帰ったハイジが、おじいさんの小屋に向かう途中で夕日を眺めながら、たった一言だけ「ああきれい！ かみさまありがとう。」¹⁸⁾と言うのだが、こういう神の出現ぶりは、何とも唐突の感を免れない。これは極端な例であるが、他にも、ゼーゼマン夫人は登場しても、お祈りを教えなかったり、いきなり何の予告もなしにおじいさんが教会へ行ってしまうりするものもあれば、またそのどちらも触れていないケースもある。唯一の例外は中村妙子訳『アルプスの少女ハイジ』¹⁹⁾である。この大型絵本はページ数が少ないにもかかわらず、両方のモチーフをとりあげていて、ゼーゼマン夫人はハイジに次のように言う。

「そう、だったら、かみさまにおはなししてごらんなさい。絵本の中のお父さんが、とおくにいるむすこのことを、一日も、わすれなかったように、かみさまはあなたをいつもみまもっていてくださるんですから。」²⁰⁾

ここには放蕩息子の話も出てくる。ハイジはその本をおじいさんに読んで聞かせ、おじいさんは「お話の中のわがままむすここそ、これまでのじぶんだったのだと、しみじみかんがえ」²¹⁾、次の日に教会へ行く。何種類かの小型の絵本（約18cm, B 5 変）についていうと、そのほとんどにおいて、ゼーゼマン夫人がハイジにお祈りを教えはするが、おじいさんの社会復帰には触れられていない。たとえば平田昭吾訳『アルプスの少女ハイジ』²²⁾では、

「字をおぼえたハイジは、いろいろな本をよみました。おばあさまはつぎに聖書をよんで、神さまにおいのりすることをおしえてくれました。

『おばあさま、神さまにおねがいすると、ほんとうにねがいごとをかなえてくれるの?』『ええ、かなえてくれますよ』 ハイジは、アルプスの山にかえられるよう、まいばん神さまにおねがいしました」²³⁾

というように変えられている。絵本以外ではどうか。むろんさきに述べたように、ページ数が増えるほどこの部分も詳しくなり、省略されることはない。つまり、対象年齢があがっていくにつれて宗教的な傾向が出てくるようだ。対象年齢の低い本として、大野芳枝訳『アルプスの少女』²⁴⁾を例にとってみたい。

この本はむしろ原作を書き直したものといっているが、そこでは次のように描かれている。ゼーゼマン夫人は

『「だれにも、いえないときには、神さまに、おいのりしなさいね。」 おばあさまは、ハイジの手を、やさしくにぎりしめて、いいました。『神さまにお話しすれば、きっとたすけてくださいますよ。』

……それから毎日、ハイジは、両手をくみあわせて、心から、神さまにおねがいしました。(神さま、どうか、おじいさんのところへ、帰らせてください。)」²⁵⁾

と、実にあっさりとお祈りを教えることに成功する。ハイジが山へ帰る場面では、

「美しいアルムに、とうとう帰ってきたのです。ハイジのほおはいつのまにか、なみだでぬれていました。」²⁶⁾

というように、神さまという言葉はまったく出てこない。ハイジはおじいさんに放蕩息子の話をせず、おじいさんの社会復帰は次のような方法で達成される。

『ねえ、おじいさん、いっしょにおいのりしましょう、わたしが、ここに帰れたのも、毎晩おいのりしたからよ。』『わしは、おいのりなんか……。』

おじいさんは横をむきました。『じゃ、わたし、ひとりで神さまとお話するわ。おじいさん、おやすみなさい。』

……おじいさんはベッドのそばにひざまずいて、おもわず、いのっていました。(神さま、ハイジを帰して下さって、ありがとうございます。どうぞ、これからも、この子をお守りください。ながいこと、世の中をにくみ、神さまをわすれていた、このわしを、どうかゆるしてください。)²⁷⁾

翌朝には2人で教会へ行っている。この他に、大幅に書き直されたものとして、若林ひとみ訳『アルプスの少女ハイジ』²⁸⁾、岡信子訳『あるぶすのしょうじょ』²⁹⁾などが挙げられる。その他はほとんど、多かれ少なかれ短縮されているだけで、大筋で原作に忠実なものがほとんどである。

以上のように、特に対象年齢の低い絵本や物語では、宗教的な箇所が省かれたり、ねじまげられ、書き換えられたりしている。また、第2部の内容にも、省略されている部分が多い。というのも、第2部でのクライマックス、というよりは『ハイジ』という小説全体のクライマックスというべきクララの歩き出すモチーフが最優先され、ハイジがフランクフルトから来た医者的心を慰めることも、クララと一緒に祈ることも二の次になっているからである。そしてフランクフルトからの医者への訪問を省略してしまうために、この小説全体の完結の仕方も違ってくる。医者が存在がなくなっている版では、ほとんどが、クララが歩け、ゼーゼマン氏が迎えに来てそれを喜び、フランクフルトへ連れて帰ることで終わっている。ペーターがお小遣いをもらい、ペーターのおばあさんにベッドが届く話も、医者がハイジを養女にする話も出てこない。医者の登場がなければ、なぜ彼がハイジを養女にするに至ったかという理由がなくなってしまうからであろう。こうして一部が変えられることによって、小説の結末さえも変わってくる。そして、ハイジがゼーゼマン夫人のただ一言であっさりとお祈りをしたり、ゼーゼマン夫人もいないのに突然お祈りを始めたり、また、なぜそうなるのかという理由づけもなしにおじいさんが社会復帰してしまうのでは、真実味が失われる。ゼーゼマン夫人がハイジにお祈りを教えること、そしておじいさんが社会復帰することは、『ハイジ』の最も重要なモチーフである。この部分が省略され、真実味と説得力が失われるのは、シュペーリにとって悲しむべきことであろう。結末の変更にしても同様である。シュペーリは、登場人物の全員が幸福になること、それが神さまの思し召しによるのだということ、ほとんどの小説を結んでいる。全員が幸福になるということは、経済的な安定をも意味する。クララが歩けたということだけでは足りないであろう。このように形を変えられた版は、もはや『ハイジ』の名に値しないと言っは言い過ぎだろうか。

【注】

- 1) 高橋健二・矢川澄子『アルプスの少女ハイジ・スイス メルヘン紀行』
(1992年 求龍堂) S. 109-110.
- 2) Johanna Spyri : Heidi, Dübsseldorf 1969, S. 126.
- 3) A.a.O., S. 131.
- 4) A.a.O., S. 151.
- 5) A.a.O., S. 160f.
- 6) A.a.O., S. 163.
- 7) A.a.O., S. 246.
- 8) A.a.O., S. 275.
- 9) A.a.O., S. 291.
- 10) A.a.O., S. 304.
- 11) 「神々のいます家」, 池田香代子訳『アルプスの少女』(1987年 講談社) S. 315.
- 12) Johanna Spyri : Kornell wird erzogen, Reutlingen o. J., S. 56.
- 13) A.a.O., S. 106.
- 14) Johanna Spyri : Heidi, Düsseldorf 1969, S. 9.
- 15) Johanna Spyri : Gritlis Kinder, München o.J., S. 202ff.
- 16) 1996年 徳間書店発行。
- 17) 1993年 チャイルド社発行。
- 18) 上掲書 S. 38.
- 19) 1991年 講談社発行。
- 20) 上掲書 S. 22.
- 21) 上掲書 S. 33.
- 22) 1991年 永岡書店発行。
- 23) 上掲書 S. 27,29.
- 24) 1985年 集英社発行。
- 25) 上掲書 S. 88.
- 26) 上掲書 S. 102.
- 27) 上掲書 S. 105-106.
- 28) 1987年 ポプラ社発行。
- 29) 1992年 金の星社発行。

2. 社会の問題

次に、シュペーリの作品における社会の扱い方を、『ハイジ』及びその他の作品について見ることにしたい。

シュペーリの小説では、かつては裕福だったが今は落ちぶれてしまった人間が再び富を得ることはよしとされるにもかかわらず、貧乏人はいつまでも貧乏のままでよい、と説かれる。ハイジは最後には医者の養女に迎えらるることになるが、おじいさんはもともと裕福な家庭の出身で、若い頃に墮落した生活をした結果、落ちぶれてしまった。ゆえにおじいさんもハイジも「再び富を得る」に値する。それに比べて、ペーターは毎月10ラッペン手に入るようになり、おばあさんはベッドを送ってもらうが、経済的に豊かになったわけではなく、依然として貧しいままである。作者は、貧乏に安住せよと説いているかのごとくである。経済的ではない、精神的な幸せ、神への帰依によって得られる幸せを求めよ、というのである。他の作品を見れば、『ペッピーノ、あわや強盗事件』(Peppino, fast eine Räubergeschichte, 1879)のペッピーノはやはり豊かな家庭の子どもで、いったん落ちぶれるが、最後には再び豊かになる。しかし『山羊飼いモニ』(Der Geißbub Moni, 1886)のモニは、かわいい子山羊は手に入れたが、貧しいままである。『ばらのレスリ』(Rosenresli, 1882)のレスリは、貧しい家の出で、養女として引き取られることになったが、引き取り先は、特別裕福というわけではない職人の家である。

シュペーリの小説に登場する子どもたちはほとんどが片親かみなし子で、主人公となると、例外なく両親がそろっていない。大人はほとんどが単身者であるが、『ハイジ』の中でも、1組も夫婦者が出てこないのは特徴的である。おじいさんもペーターの母や祖母も、ゼーゼマン夫人もゼーゼマン氏も、そして医者でさえも配偶者を亡くしている。他の代表的な長編の例をあげれば、グリトリの子どもたち、『彼女はいったいどうなるのかしら』のシュトラール家の子どもたち、コルネリには母親が、『彼女はいったいどうなるのかしら』のドリ、『コルネリの教育』のホルム家の子どもたち、『ヴィルデンシュタイン城』のマクサ夫人の子どもたちには父親が欠けている。そしてこれらの小説のいずれにおいても、物語の進行中に父か母か子どもが死ぬ。矢川澄子は、

「子供にとって血縁のきずななどというものがいかにあてにならないかを、この小説はたくまずして教えてくれているような気がする。」³⁰⁾

と言っているが、さらに付け加えれば、経済的な豊かさもあてにはならない、とシュペーリは説いている。彼女の小説の子供たちは、貧しい家庭の子ならば、ほとんどが健康で、なおか

つ個性的で、夢を持っている（ハイジ、ペーター、『コルネリの教育』のディーノ、ニカ、アグネス、ムックス）。それと対照的に、豊かな家庭の子はほとんどが病弱である（クララ、コルネリ、『グリトリの子どもたち』のノラ、『彼女はいったいどうなるのかしら』のヘレーネ・フォン・アッシェン）。つまり裕福な家庭はいつも不幸に見舞われていて、貧しい家庭は、神の祝福を受け、精神的に豊かな生活を送っている。シュペーリの世界では、経済的な豊かさは精神的な豊かさをもたらすものではなく、むしろ何の役にも立たないものとされる。『ハイジ』で作者は、ゼーゼマン氏の口からこう言わせている。

「おじさん、ひとこと申しあげたいことがあるのです。私が長年の間、ほんとうの喜びを味わったことがないのは、おわかりいただけだと思います。かわいそうな娘を見れば、いくらお金や財産があっても、何になるでしょう？ 富で、むすめを健康に、幸福にしてやることはできないのですから。……」³¹⁾

しかしながら、その一方で、結局は、経済的な豊かさがあったからこそ、最後に幸福がもたらされるのではないだろうか。というのは、もし足の悪いクララが貧しい家庭の子どもであったならば、山へ来ることは不可能であったろう。ということは、歩くことはできなかったと考えられないだろうか。もちろん、最終的にはハイジの助力や、クララの努力や、もしかしたら神の力が必要であったが、経済的な豊かさなしにはまったく不可能だったと考えられる。そして他の小説でももちろん、最後には、経済的に豊かな人が貧しい人を援助するという形で、結末をハッピーエンドへと導いて行く。彼女の言う「経済的な豊かさは何の役にも立たない」という考えは成り立たないであろう。最後には結局、お金の力が幸福をもたらすのだ。しかし彼女はそれを神の力、神のみわざと言い切る。それに加えて、ゼーゼマン家の人々、特に召使たちやロッテンマイヤー女史を使って、経済的な豊かさと高い生活水準は、人間相互の心情的な結びつきをなくしてしまう危険を蔵していると説く。貧困は神から与えられたものとして扱われ、社会的な不正ではない。貧困も心の病気も、神の摂理として受け容れなければならないのだ。こういう考え方が批判の対象になる。15世紀の児童文学の批評家ハインリヒ・ヴォルガストはすでに1896年に次のように述べている。

「私は、物語の与える直接の知的な、また道徳的な影響を、それほど高くは見積もらない。また、学校や家が目を見開くことだけを教える場合、子供たちがシュペーリの物語を読むことで、誤った社会観を持つかもしれないという心配もしない。もっと重要なのは、芸術的な点での一面性である。その一面性は、たしかに作者の宗教的な傾向から流れ出す、現在と現実からの非リアリスティックな背反を明らかに示している。一見したところ、悲惨そのものは彼女の芸術的関心を刺激しなかったようだ。シュペーリの場合、悲惨はたいてい、神への

信頼と登場人物の善良に光をあてるためにのみ描かれる。そういうわけで、心ゆさぶるモチーフを内蔵するテーマが、センチメンタルな効果しかあげないのである。

……シュペーリの作品の中でもっともすぐれている『ハイジ』においてさえ、宗教的な力が導入されるやいなや、すぐれた性格描写の技術も破綻する。」³²⁾

シュペーリは保守的な思想の持ち主であった。女性の大学進学に反対だったといわれるが、そういう考え方は、彼女の著作が児童文学作品であるとはいえ、それらの中はかなりはっきりと読み取ることができる。たとえば『彼女はいったいどうなるのかしら?』に出てくるリヒテンシュテルン夫人は、ヨーロッパの平和が危機に瀕していると考え、病弱の子どもをおっぼり出して政治活動に忙しい。その子の世話を頼まれた少女ドリは、そういう活動のために病気の子どもなことなどかまわない人は、ヨーロッパが平和を取り戻すのに何の役にも立たない、と思う。作者も同じ考えであることは、その男の子ヴィリを死なせてしまうことにも現れているが、そもそもこういう問題の立て方がおかしいのである。シュペーリはまた、社交界の女性が好きらいである。同じ小説の中で重要な役割を演ずるシュトラール博士という学者の妻は、すぐれた才能の持ち主だったが、社交界に出て絶えず緊張を強いられ、身も心もすり減らしたあげく、ついに重い精神障害を起こして死んでしまう。またドリが、博士の病身の子の世話をしたりヴィエラのヴィラに滞在していたときに会った女性たちは、食後に音楽を奏し、文学や芸術について教養豊かな会話を、子どもの様子を見にきた博士と交わす（そのときにゲーテの詩が出てくる）。そして、素朴で子ども好きのドリを馬鹿にする。彼女たちの1人は、妻を失った博士と接近するが、博士は結局ドリと結婚してしまう。社交婦人の対極ともいうべきドリは、作者の理想像と見られ、ハイジが成長すればあるいはこういう女性になるのかもしれない、と思わせる。この長編は『ハイジ』のそれよりも年長の読者を想定している。前編にあたる『彼女はいったいどうなるのかしら?』では、ドリはきれいな男の求婚を拒否しつつづけるし、続編の『彼女はどうなったのか』では、入り組んだ男女関係が描き出され、最後にドリが博士と結婚して幸せになる。こういう内容の小説なら、そこに、ヨーロッパの政治情勢だの、社交婦人だのが出てきてもそれほど不思議ではない。

しかし、『コルネリの教育』は、『ハイジ』と似た少年少女向けの小説であるから、そこに革命の話などが出てきては、場違いの感を免れない。しかも、その出方が唐突である。夏の間、病気静養のためコルネリの住むイラーバッハの村にきていた少年ディーノが、遊びにきたコルネリの憂鬱そうな顔を見て、こういう話をする。銅のフライパン (Kupferpfanne) と洗濯がま (Waschkessel) が、パリに行って革命に遭った。2人は、もう少しカッコいいものになりたいと思って、それぞれ、アイスボックス (Eisschrank) と、お茶わかし (Teekessel) に変身する。しかし、やがて前身を嗅ぎつけられそうになって苦しい思いをするが、そのうちに革

命が終わって、2人ともあっさり捨てられてしまい、「ああ、革命になんか行くんじゃないかった」(Oh, wär ich nie in die Revolution gegangen!)と嘆く。ディーノの説明によれば、

「もう誰も、もともと自分のいるべきところにいなくなり、何もかもニカワがはげたようにバラバラになるときが革命である。」

なぜ、少年が少女に、たとえ話ではあってもこんな話をして聞かせるのか。何の脈絡もなく銅のフライパンや洗濯がまを持ち出して、コルネリを笑わせるのだが、憂鬱な少女を面白がらせるのに、何も革命の話などする必要はないではないか。多少の無理をしてでもかなり長いこの話を挿入したのは、作者の保守思想の現れというほかはないが、これをマルテの説く神さまの話と読み合わせれば、当然、人間はたとえ不満があっても、神が下された生活に安んじているべきで、現在の身分にふさわしくない高望みをしてはならない。いったんはその望みが叶えられても、やがてボロが出て、前よりももっと不幸な身の上に陥る。初めに天から与えられたものに満足し、安住しているのが、幸せへの道なのだ。そう作者は説いているもののように思われる。

【注】

30) 「神々のいます家」, 池田香代子訳『アルプスの少女』(1987年 講談社) S. 316.

31) Johanna Spyri: Heidi, Düsseldorf 1969, S. 295.

32) Heinrich Wolgast: Das Elend unserer Jugendliteratur. Zit. bei: K. Doderer, S. 130f.

(本学講師=ドイツ語担当)

参 考 文 献

- Doderer, Klaus : Klassische Kinder- und Jugendbücher (Weinheim und Basel 1969).
- Doderer, Klaus : Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur (Weinheim und Basel 1975-1982).
- Dyhrenfurth, Irene : Geschichte des deutschen Jugendbuches (Zürich und Freiburg i. Br. 1967).
- Hürlimann, Bettina : Europäische Kinderbücher (Zürich 1959).
- (『子どもの本の世界』野村滋訳 1969年 福音館書店).
- Köster, Hermann Leopold : Geschichte der deutschen Jugendliteratur (Braunschweig 1927).
- Spyri, Johanna : Gritlis Kinder (München o. J.).
- Spyri, Johanna : Heidi (Düsseldorf 1969).
- Spyri, Johanna : Heidi (Menden o. J.).
- Spyri, Johanna : Heidi (Stuttgart 1987).
- Spyri, Johanna : Schloß Wildenstein (Reutlingen o. J.).
- Spyri, Johanna : Was aus ihr geworden ist (Gotha 1889).
- Wild, Reiner : Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur (Stuttgart 1990).
- ヨハンナ・スピリ作 池田香代子訳『アルプスの少女』(1987年 講談社)
- 大野 芳枝訳『アルプスの少女』(1985年 集英社)
- 岡 信子訳『あるぶすのしょうじょ』(1992年 金の星社)
- 関 楠生訳『アルプスの少女』(1975年 学習研究社)
- 中村 妙子訳『アルプスの少女ハイジ』(1991年 講談社)
- 平田 昭吾訳『アルプスの少女ハイジ』(1991年 永岡書店)
- 若林ひとみ訳『アルプスの少女ハイジ』(1987年 ポプラ社)
- 野上彌生子訳『アルプスの山の娘』(1920年 岩波書店)
- 武鹿 悦子訳『ハイジ』(1993年 チャイルド社)
- フレッド・ブローガー, マーク・ブローガー作 堀内静子訳
- 『ハイジの青春アルプスを越えて』(1990年 ハヤカワ書房)
- シャルル・トリッテン作 各務三郎訳『それからのハイジ』(1979年 読売新聞社)
- シャルル・トリッテン作 各務三郎訳『ハイジのこどもたち』(1980年 読売新聞社)
- 荒井冽『名作に学ぶ生き方〈西洋編〉』(1990年 あすなろ書房)
- NHK取材班『アルプスの少女ハイジ, 夢紀行』(1990年 日本放送出版協会)
- 国松孝二編『スピリ少年少女文学全集』(1960-1961年 白水社)
- 国松孝二・高橋義孝編『現代世界文学講座4ドイツ編』(1956年 講談社)
- 高橋健二『シュペーリの生涯』(1972年 彌生書房)
- 高橋健二・矢川澄子『アルプスの少女ハイジ, スイスメルヘン紀行』(1992年 求龍堂)
- 日本独文学会編『ドイツ文学辞典』(1956年 河出書房)
- 波多野完治・島田謹二監修『世界の児童文学』(1967年 国土社)
- 『平凡社大百科事典第4巻』(1984年 平凡社)